

令和元年6月20日現在

機関番号：23303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04613

研究課題名(和文) チェコにおける高等教育機会とジェンダーバイアス：女性の上昇を阻害する要因

研究課題名(英文) The chance and the gender bias in Czech higher education: the factor which obstacles female career

研究代表者

石倉 瑞恵 (ISHIKURA, Mizue)

石川県立大学・生物資源環境学部・准教授

研究者番号：30512983

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：チェコの大学において女性が直面する学術分野の壁、博士課程から研究職への上昇を遮るガラス・シーリングを視覚化し、社会認識、女性のライフコース、大学組織・文化にその要因を追求した。保守的志向性が高いため、機械工学等特定の分野におけるモデル不在が、「女子学生の低割合 女性研究者(モデル)の希少」という循環を生んでいること、女性に内在化された保守的性役割認識と大学の求める経営力ある研究者像との乖離・葛藤が、女性研究者のフェイドアウトを引き起こす要因の一つとなっていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、チェコの大学における学術分野間の女性の偏向や女性研究者のフェイドアウトの実相と要因を明らかにすることを通し、女性への機会開放や社会進出の推進が同時にジェンダー・バイアスを生み出す危険性があることを示唆するとともに、歴史的経緯や社会の特質に関する分析を踏まえた対策の重要性を提起している。チェコと日本には女性に内在化された保守性という類似点があるので、女性のライフコースに関する多様なモデルの提示、女性の使命とされてきた家事・育児に対する高い価値の付与等、この研究から得られる提案を日本の文脈の中で捉えなおす必要がある。

研究成果の概要(英文)：The wall before the field of science and the glass ceiling which interrupts a rise to researchers from the doctoral courses for women are visualized, which factors are considered through analyzing the society recognition, the female life course and the university organization culture in the Czech Republic. Because of the conservative oriented society, the absence of models in the technical field like the mechanical engineering causes the never-ending circulation; the low ratio of female students to the absence of models and again the low ratio. The discord between the conservative gender role inherence in women and the role of the researchers as proprietors which Czech universities demand causes the female negativity for the upper career, which can be thought as the aspect of the glass ceiling for the female research career.

研究分野：比較教育学

キーワード：チェコ 高等教育 女子教育 女性研究者 技術系高等教育 ジェンダー

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

チェコでは、19世紀中期の民族復興運動とともに生じた女性のためのチェコ語・チェコ文化学習が契機となり、19世紀後期の女子ギムナジウム創設、女性への大学(哲学部、医学部)開放、1918年独立後の法学部への進学認可と、女性の教育機会は飛躍的に向上した。20世紀中期には、女子大学生は学生全体の半数を占めるまでになる。しかし、女子学生の占める割合は、2016年度修士課程全体で59.7%であるのに対し、人文・社会科学系67.0%、自然科学系42.5%、技術系34.1%、農業系65.3%、医学系67.1%と分野間でのばらつきがあり、技術系における女子学生の割合は低い(Tenglerová, 2018, 49-51)。また、第二学位(修士)課程までに占める女性の割合(59.7%)は高いが、博士課程(46.8%)、研究職(26.6%)と、キャリア・ステージが上昇すると女性の割合が減少することも明らかにされており(2016年度, Tenglerová, 2018, 21)、高等教育機会獲得のプロセスが、同時にジェンダー・バイアスを生じさせたとの仮説を立てた。

### 2. 研究の目的

(1) チェコの大学において、女子学生が直面する学術分野の壁、および、女性の上昇を遮るガラス・シーリングを視覚化する。学術分野・大学間の女子学生の偏り、および博士課程から研究職に至る女性減少の実態を詳細な事例に基づいて捉え、ジェンダー・バイアスを規定する条件を明らかにする。

(2) ジェンダー・バイアスの実相を解釈し、それが生じた背景、要因を明らかにする。すなわち、ジェンダーを巡る社会認識、女性のライフコース、大学組織・文化を社会主義から現在に至る時間軸の中で把握し、学術分野の壁やガラス・シーリングが生じた背景を明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1) 公立22大学を(a)社会主義以前に設立された総合大学(以降、伝統総合大学)、(b)社会主義以前に設立された技術大学(以降、伝統技術大学)、(c)社会主義技術専門大学を母体とする都市部総合技術大学(以降、総合技術大学)、(d)社会主義技術専門大学を母体とする地域総合大学(以降、地域総合大学)の4大学群に分類し、それぞれに属する大学・学部における女子学生の割合、および女性研究者の割合を調査、比較検討し、ジェンダー・バイアスを規定する条件を明らかにした(以降、文中および図中の大学名冒頭に付した(a)~(d)は、この4分類を示している)。

(2) 中等教育段階女子生徒に対するメンター・プログラム報告や、社会主義世代、及び市民革命後の若手世代の女性研究者、優れた女性研究者に与えられる「ミラダ・パウロヴァー賞」に関するデータ、大学改革に関する資料や大学年報を手掛かりとして、(1)の規定条件を解釈し、ジェンダー・バイアスの要因を分析した。

### 4. 研究成果

#### (1) 女子学生数の偏向と女性研究者減少の実態

学士課程における女子学生数の偏向

技術系学部では女子学生の割合が最も高い学部と女子学生の割合が最も低い学部との間で割合の差が

大きく、図1で示す通り5.8%から78.5%までの開きがあることが明らかになった。図2では、技術系学部をもつ17大学の技術系35学部を学士課程女子学生の割合で順位づけし、下位5位と上位5位を示した。女子学生の割合が低い学部は、電子工学、機械工学、情報工学であり、高い学部は建築学、化学、食品科学である。また、下位5位中4大学を(d)群が占めており、地域総合大学では女子学生の割合がより低いことが明らかである。

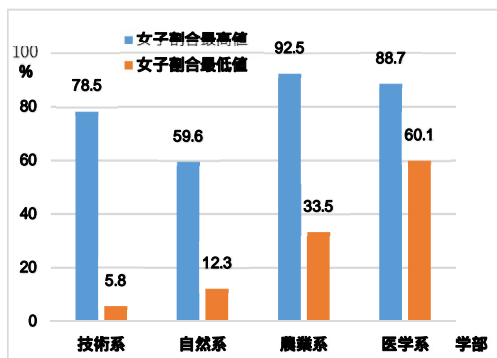


図1 女子学生の割合の最高値と最低値(分野別)

注：図1～図6は、対象大学それぞれが発行している2017年度年報( Vjroční zpráva o činnosti za 2017 )をもとに作成した。大学名の代わりに付したアルファベットが同一の場合は、同一大学を示す。

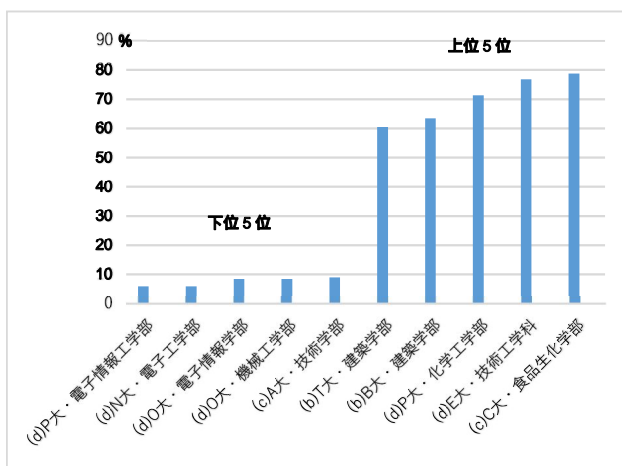


図2 女子学生の割合の高い大学学部と低い大学学部(技術系)

### 学士課程から博士課程への女子学生の割合の変化

学士課程から博士課程にかけての女子学生の減少を大学・学部別で把握した。(a)から(d)4つの大学群からそれぞれ1大学を事例として用い、その傾向を示す。図3では、各大学から学士課程の女子学生の割合が高い2学部を、図4では、学士課程の女子学生の割合が低い2学部を抽出し、課程毎の割合を示した。図3からは、学士課程で女子学生の割合が高い学部、すなわち人文・社会科学、医学系、建築学・化学・食品科学系では、博士課程の段階で女子学生の割合が低くなるが、50%以上の割合にとどまっていることがわかる。しかし、(d)N大学・教育学部のように著しく低くなる学部もある。教員養成系学部であることが要因の一つではあるが、同じ学部でも(a)M大学ではこのような変化はない。

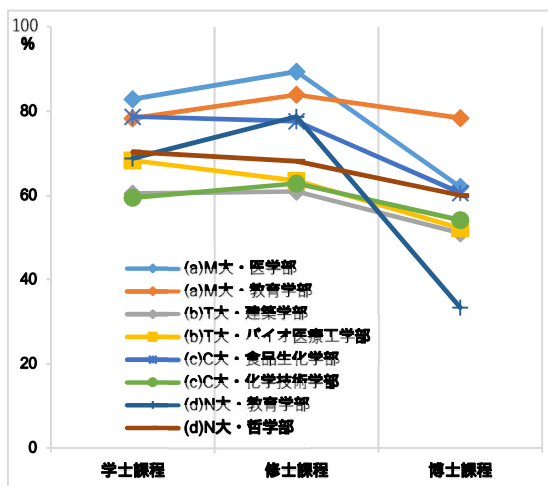


図3 4大学において女子学生の割合が高い学部

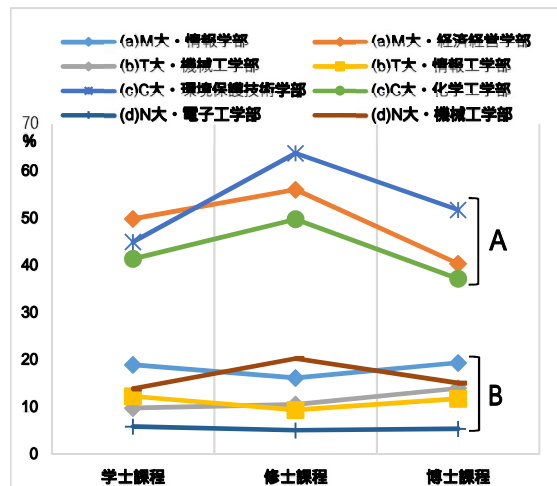


図4 4大学において女子学生の割合が低い学部

図4からは、AとBとの間に明確な分離を認めることができる。Aの環境学・経済学・化学系学部は、学士課程において男女の比率がほぼ等しい学部である。女子学生の割合は、修士課程で高くなり、

博士課程で低くなる。一方で、Bの電子工学、機械工学、情報工学は、学士課程の段階で女子学生の割合が最も低い学部であり、博士課程まで割合はほぼ変わらないが、若干高くなる傾向にある。

#### 職階毎の女性研究者の割合

図5では、で使用した4大学について、職階毎の女性研究者の割合を示した。4大学の事例と全国大学平均とを比較すると、(a) 伝統総合大学のM大学は平均を上回り、技術系学部を中心とする伝統技術大学、総合技術大学、地域総合大学(b~d)が平均を下回っていることがわかる。教授では、割合の低い順に(b) T大学、(c) C大学 (d) N大学 (a) M大学である。前者2大学は技術系と自然科学系学部のみのものであるが、後者2大学には人文・社会系学部が含まれるため、女性教員の割合が若干高くなる。その裏づけとなるのが図6である。N大学において教授に占める女性の割合が高い学部は、教育学、経済学、芸術デザイン、哲学、法学と人文・社会科学系学部が占めている。女子学生が少ない機械工学、電子工学では、教授に占める女性の割合も最も低い。医学系である保健学は減少の傾斜が最も大きく、医学部における女性研究者減少の一般的傾向を示している。

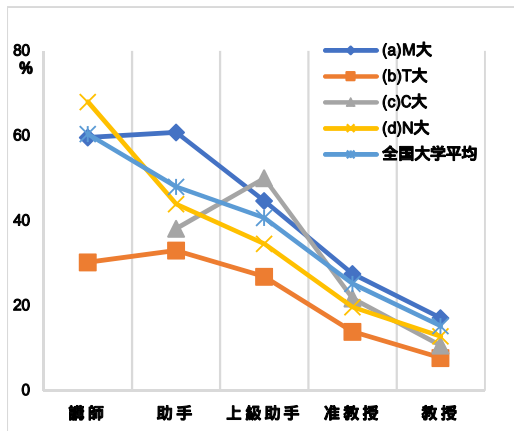


図5 4大学における女性研究者の割合

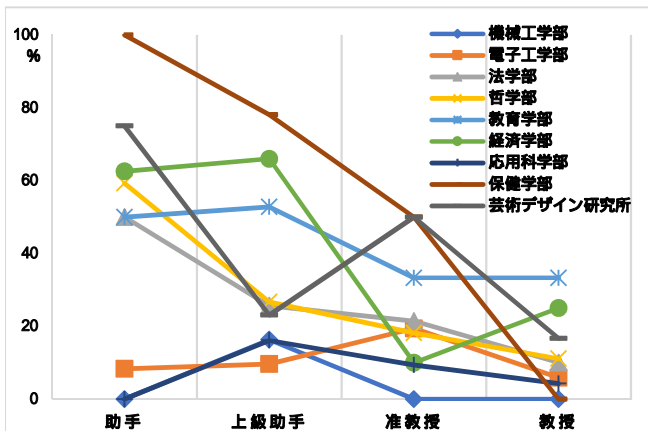


図6 N大学における女性研究者の割合(学部別)

## (2) 学術分野の壁、およびガラス・シーリングの背景

### 学士課程における女子学生の偏向 - 電子工学・機械工学の壁

チェコ工科大学を中心に18世紀初頭から開設されていた機械工学は、重工業が興った19世紀には主要な高等教育分野の一つであった。社会主義期になると、電子工学、機械工学は産学連携に基づいた教育・研究を展開し、チェコの主要産業を支える技術専門高等教育として社会主義政策の重点分野となった。しかし、女性の高等教育進学が実現した19世紀以来、技術系高等教育は女性に対して閉鎖的であった。社会主義期には女性が労働者として重化学工業に携わるようになったが、技術系専門大学では男性ヘゲモニーが築き上げられており、女性の技術教育の中心は中等教育段階であった。

以上は、電子工学、機械工学において女子学生の割合が低いことを裏づける歴史的背景であるが、現在もその傾向が続くのはチェコ社会の保守性ゆえである。社会主義は自由な思想を妨げていたため、チェコは70年代フェミニズムの潮流に乗ることがなく、女性の意識改革を経なかったこと、1989年市民革命以降、チェコ高等教育は欧州の高等教育を模倣する形で発展してきたが、女性学やジェンダー論は西欧ですでに過去の学問であるとみなして重視しなかったことが保守性の背景となっている。保守的社会では人々の行動は「モデル」に左右される。技術系高等教育への進学をエンカレッジするメンター・プログラムの報告では「モデルの不在」が女子生徒・学生にとっての壁であると指摘されている。

(Cidlinská, 2013, 7-8)。例えば、ミラダ・パウロヴァー賞へのノミネート女性研究者の中には、電子工学・機械工学研究者がいない (Institute of Sociology of the Academy of Sciences of the Czech Republic, 2016)。それらは、明らかにモデル不在の分野であり、エンカレッジ・ファクターの欠如により中等教育段階の女子生徒の関心を十分に育むことができないと考えられる。図6を参照すれば、機械工学、電子工学では助手の段階から女性の割合が低く、「モデルの不在 女子学生の低割合 女性研究者(モデル)の希少 女子学生の低割合」という循環が生じていると考えられる。保守性は地域社会の方が強いため、地域人材育成を担う(d)地域総合大学において女子学生はより少ない傾向にある。

#### 博士課程以降の女性研究者減少の要因

「学士」は、EU労働市場における資格となる第一学位であるが、チェコでは「学士」に対する社会認識が低く、「修士」を大学卒業と認識する傾向が強い。図3や図4で認められるような修士課程における女子学生の割合の高さは、男子学生の離学を意味している。就職や国外の大学進学など女子学生とは異なった進路が開かれていることを示唆しているものの、本研究では男子学生の進路について明らかにすることはできなかったため、今後の研究課題としたい。

博士課程は、研究職に至る最初の段階とみなしてよい。チェコの研究組織には、大学の他にチェコ科学アカデミーがある。科学アカデミーは多様な学術研究組織を全国に展開している。博士課程在学中から研究員として勤める女子学生が多く、研究職としてのモラトリアム期を送ることができる。なお、研究員は研究職とはみなされない。

博士課程以降、女性の割合が減少する要因は、女性のライフコースに関する保守的認識である。家族を形成すること、子育てをすることを女性の使命とし、女性の成功は「家庭と仕事との両立」にあるとする認識が強い。3歳まで母親が育児を担うという「3歳児神話」も浸透している。女性の使命が家事と育児にあるという認識を強固にしたのは社会主義制度である。社会主義は、女性労働を推進、定着させたのであるが、女性の役割は家事など日々繰り返される仕事、すなわちリプロダクションをこなした上で社会的労働に従事することであると考えられていたので、女性は社会的労働の主力として扱われることがなかった。女性は不安定労働力であり、雇用における男女間の隔絶や階層化、賃金格差は正当であるととらえられていた。女性研究者も社会主義期には同様の待遇を受けていた。とりわけ、社会主義は育児に価値を付与する意識を育まなかったため、育児を担う女性研究者に対する偏見と差別的処遇が存在した。さらには、研究と育児の両立のためには社会的保育は十分な施策ではなかったが、女性研究者は困難や葛藤は育児という使命を担う女性が経験する当然の課題として受容していた。

女性の意識改革を経ていない現在のチェコにおいても、女性自らが男性優位の社会構造・大学文化を容認する傾向にある。そして、博士課程以降の研究職への長い道のりと、家庭をもち育児と両立させるライフコースを想定する中で、女性研究者は、育児と研究との両立が不可能であると考え。すなわち、女性研究者は育児のためにキャリアを中断すると大きな後れをとり研究に復帰できないことを博士課程の段階から自覚している。市民革命後の大学改革、すなわち大学国際化・自由化の中で、長期間の在外研究、博士取得、ジュニア助成の獲得、そして准教授へというキャリア・ステージが形成されたからである。このキャリア・ステージには、女性研究者が葛藤を抱える二つの通過地点がある。一つは、ジュニア助成への応募資格がある35歳までである。長期在外研究や助成金への応募時期が家族形成期にあたり、若手キャリアの確立と育児との両立という点で困難に直面する。二つ目は、研究を確立してから准教授に就くまでのプロセスである。今や大学研究者には、数々の助成金を獲得し研究室を運営する経営者となることが

求められる。育児に責任感を感じる女性研究者は、マネジメントの手法を身につけ、プロジェクトを立ち上げて資金を獲得し、チームを率いるという研究者の使命との間で葛藤を抱え、消極的になる。マネジメントという資質が、保守的女性性と反しており、そのような女性研究者のモデルが不在であるということも理由の一つである。

すなわち、女性に内在化された保守的性役割認識と大学の求める研究者像との乖離・葛藤が、女性研究者のフェイドアウトを引き起こす要因の一つとなっている。

#### 参考資料

Cidlinská, K., 2013, 'Mentoring: Year 3,' in *Měsíčník newsletter 02/2013*. Národní kontaktní centrum – gender a věda Sociologického ústavu AV ČR, Prague.

Institute of Sociology of the Academy of Sciences of the Czech Republic, 2016, *Milada Paulová Award 2009-2016*, Prague.

Tenglerová, H., 2018, *Postavení žen v české vědě. Monitorovací zpráva za rok 2016*. Sociologický ústav AV ČR, Praha.

#### 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

石倉瑞恵, 2019, チェコにおける女性研究者のライフコース 保守的女性性とキャリアとの葛藤を中心に , 石川県立大学研究紀要, 1 : 87 - 96.

石倉瑞恵, 2018, チェコの女性研究者をめぐるジェンダーへのアプローチ コンタクト・センターの活動を中心に , 石川県立大学研究紀要, 2 : 45-53.

石倉瑞恵, 2017, チェコの女性研究者をとりまくジェンダー格差に関する考察 社会主義の功罪を中心に , 平成 28 年度石川県立大学年報, 59-67.

〔学会発表〕(計2件)

石倉瑞恵, 2018, チェコにおける女性研究者のジェンダー認識とキャリア形成, 日本比較教育学会第54回大会(広島).

石倉瑞恵, 2017, ジェンダーから見たチェコ高等教育の現状と課題, 日本比較教育学会第53回大会(東京).

#### 6 . 研究組織

(2)研究協力者

研究協力者氏名：リンコヴァー、マルツェラ(チェコ科学アカデミー国立コンタクト・センター)

ローマ字氏名：Linková Marcela (National Contact center for gender and science, Institute of sociology CAS)